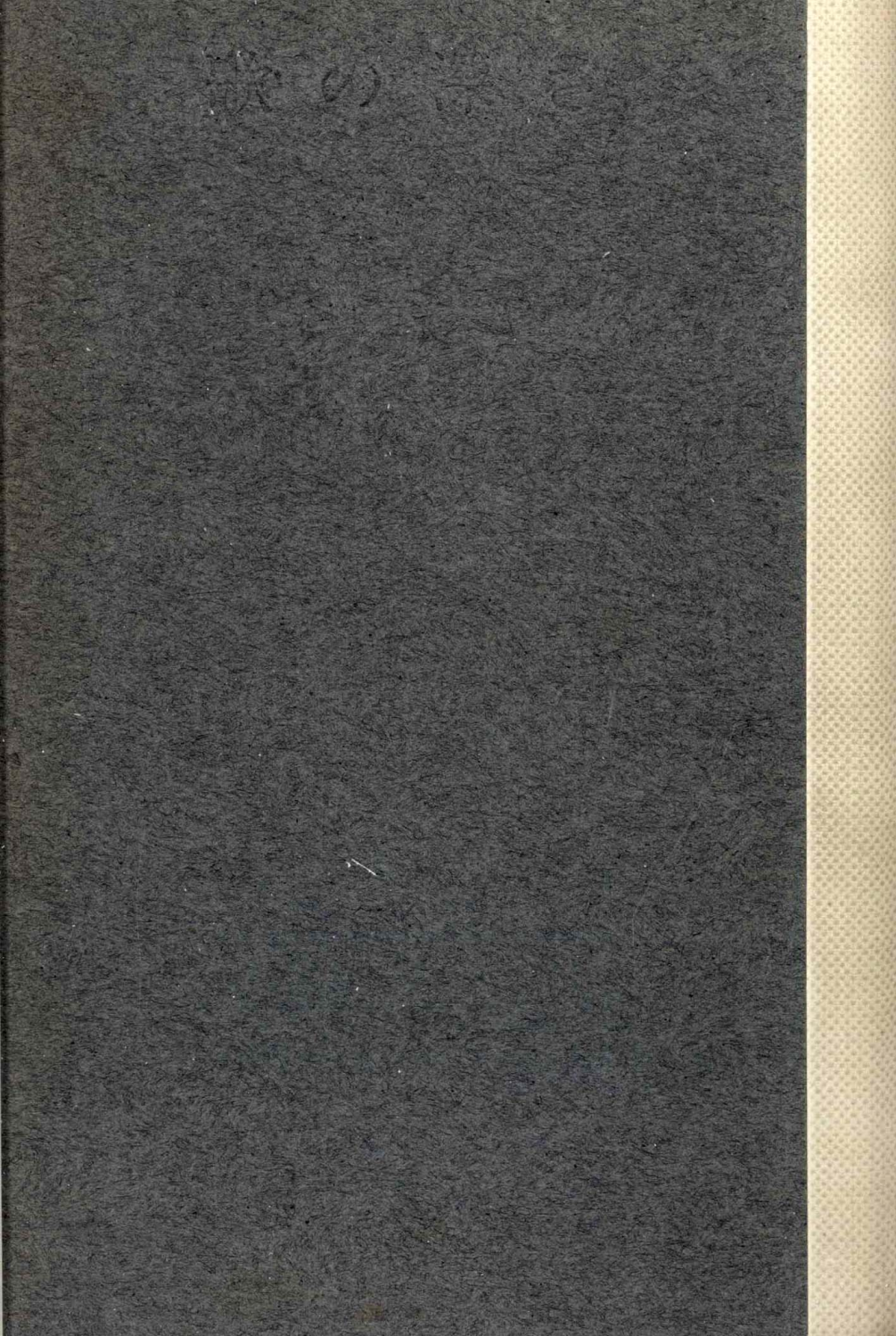


東洋の歴史



歌の深さ

—古典和歌・現代短歌—

安田章生 著

創元社

歌の深さ

—古典和歌・現代短歌—

著者略歴

1917（大正6）年兵庫県に生まれる。1939（昭和14）年東大文学部国文科卒。文博。甲南大教授・歌誌『白珠』編集。著書『日本の芸術論』『藤原定家研究』その他。

昭和46年11月13日 第1刷発行

定価 850 円



©著者 安田章生
やす た あや お

発行者 矢部良策

印刷者 寿印刷株式会社

発行所 大阪市北区樋上町45 創元社

郵便番号 530 振替大阪 57099 電話 大阪 363—2531（代表）
東京営業所・新宿区山吹町77（電話269—1051）郵便番号 162

1092—461102—4202

目次

I

歌の深さ……………	七
短歌の現代……………	二四
無我の詩心——良寛のこと……………	四一
古典和歌と現代短歌との間……………	五四

II

万葉集と古今集・新古今集……………	九
古今集論……………	九〇
新古今集論……………	一〇三

花園院	一三三
-----	-----

光嚴院	一三〇
-----	-----

III

日本芸術の伝統と情操	一九
------------	----

古典和歌のユーモア	一九五
-----------	-----

和歌的抒情精神と近代文芸	二〇九
--------------	-----

小林秀雄と中世文学	二二一
-----------	-----

定家と西行と茂吉と	二五〇
-----------	-----

現代短歌の有心・無心	二六四
------------	-----

*

あとがき	二九五
------	-----

歌
の
深
さ

古典和歌・現代短歌

I

歌の深さ

「歌の深さ」という演題でしばらくお話しようとして、私の念頭にまず浮かんでくる一つのエピソードがあります。それは、伊藤左千夫の評価をめぐる夏の漱石と斎藤茂吉との感想です。

漱石は、明治三十九年五月五日づけの森田米松（森田草平）あてへの手紙のなかで、「左千夫が昌子（注、晶子の書き誤り）を評したのを明星で『これほど本人の魯鈍を発表せるものなし』とか云ふて居る。左千夫が見たら怒るよ。元来左千夫なんて歌論杯出来る男ではない。只子規許り難有がつて自ら愚なうたを大事さうに作つて居る。」といっている。これは、親しい弟子あてに気楽な気持ちで書いているので、漱石はその思っているところを正直に表現していると見られます。漱石は、この前年には『ホトトギス』に発表された左千夫の小説「野菊の墓」を読んで感心し、本人の左千夫あてに「野菊の花は名品です。自然で、淡泊で、可哀想で、美しくて、野趣があつて結構です。あんな小説なら何百篇よんでもよろしい。」（明治三十八年十二月二十九日づけ書簡）といつてやっていますし、同様のことを、弟子の森田米松あて（同年十二月三十一日づけ書簡）や鈴木三重吉あ

て（翌年一月一日づけ書簡）にも書いています。また、明治三十九年一月十日づけの森田米松あて書簡では、森田が「野菊の墓」の評を書くことをたいへんよろこんでいます。とすると、漱石は、左千夫の小説「野菊の墓」は高く評価していたけれども、その歌論や歌は認めていなかったということになります。にもかかわらず、明治三十九年当時（時に漱石は数え年四十歳）、漱石が左千夫の歌論や歌を低く評価していたことは確かだと見られます。漱石のこういう左千夫評が、左千夫を尊敬するその門人たちにとって愉快であるはずはありません。後年、漱石全集によってこの手紙を読んだと思われる斎藤茂吉は、このことに触れて漱石に一矢をむくいているのです。

左千夫の「与謝野晶子の歌を評す」という一文は、『馬酔木』明治三十九年三月号に載り、それに対して、『明星』の同年五月号で与謝野寛は「左千代氏マヤの『与謝野晶子の歌を評す』の一文、かばかり正直に自家の魯鈍を表白せるものは珍し。詩を評せむとならば、せめて日本語だけなりとも修養せよ。」（四月の新聞雑誌）というように、高飛車に反駁しているのです。それについて、茂吉は、

或は漱石先生は馬酔木所載の精細な批評は読んでゐなかつたのかも知れず、ただ鉄幹さんの大言壮語だけを読んで『元来左千夫なんて歌論杯出来る男ではない』と云つたものかも知れぬ。

併しこれは善意に解したので、若し漱石先生が馬酔木所載の論文を読んでのうへの言とせば、漱石先生の失敗で、漱石先生は歌のことは皆無分かつたといふことになるのであり、私信ではあるが恥を天

下に暴露したことになるのである。もつとも文学芸術の批評鑑賞は絶待的のものでないから、却つてからいふことをいふ僕が恥を天下にさらしてゐるのかも知れぬ。けれども現在の僕は、漱石先生の歌に対する鑑賞眼は駄目だと信じてゐる。

といい、また、

なほ漱石書簡には、『自ら愚な歌を大事さうに作つてゐる』といふのがある。これなども実におもしろい句で、漱石先生は左千夫先生を寧ろ輕蔑して云つてゐるのであるが、實際そのとほりであつたとおもふ。實際左千夫先生は和歌を作るに全力を瀝いだと謂つていい。漱石先生の如き聰明博識な文豪の眼から見れば実に果敢ない三十一文字の和歌などに熱中して、さういふ文豪の眼から見れば『愚な』小文芸に没頭して生を終はつた人である。一首を作るにも、一つの天爾遠波を成すにも苦心慘憺して、『大事さうに作つた』人である。

併し僕は秘かに思ふのに、漱石先生の文芸と左千夫先生の文芸とを比較したら、そして嚴格な批判を下したら、どつちがどうか分らない点がありはせぬか。即ち、漱石の出来のいい小説一篇と、左千夫の歌の出来のいいもの一首とを比較したら、どつちが永い性命を有つかが分かるまいといふ意味である。ひとが僕の言葉を聞いたなら、直ぐ妄語だといふかも知れないが、さう俄かに妄語だと言つてしまはれないものがあるのではなからうか。(昭和七年九月刊『短歌講座』第二巻初出「伊藤左千夫の追憶」)

ともいって、その師である左千夫の肩を大いに持つてゐるのです。

左千夫がすぐれた歌を詠んだのは、主としてその晩年であり、それは明治三十九年よりもむしろ後のことだといえます(左千夫は大正二年に数え年五十歳で死んでいます)、明治三十九年当時の漱石が、

左千夫について先に紹介したように考えていたとしても、そのことから直ちに漱石の詩歌鑑賞眼の程を疑うことは、当を得ないと思われまゝ。また、漱石がすぐれた俳句を少なからず詠んでいることは周知のとおりで、たまたま左千夫の歌を認めなかったからといって、漱石の詩歌を見る眼が全般的に見て低かったとは考えられないことです。あるいは、茂吉が漱石と左千夫とを比較して、漱石の出来のいい小説一編よりも左千夫の出来のいい歌一首が永い生命を持つてあるという意味のことをいっているのは、ヒイキの引き倒しの観があると、私には思われます。といひますのは、一般に、小説というジャンルが、時の社会情勢に関わり合う性格をより多く有しているのに対し、詩歌というジャンルはそういう性格がより少ないものだからです。したがって、一般論としていうと、詩歌は小説よりも、社会情勢の変化を超えて、より永い生命を持ちやすいものなのです。つまり、たとえ左千夫の歌一首が漱石の小説一編よりも文学として永い生命を持ちえたとしても、そのことが直ちに文学者としての左千夫と漱石との優劣を示す尺度となるわけではない。それは、抒情詩と小説とがジャンルとしてになっている性格の相違にもとづくところが多分にあることを考えねばなりません。事実、左千夫よりも漱石ははるかに偉大な文学者であるというべきであり、このことは、誰の眼にも明らかだと思ひます。茂吉の論は、小説と抒情詩というジャンルが有している性格の相違からくる問題を、漱石と左千夫との優劣の問題にすりかえたところがあるわけで、そこに私は、先に述べたようなヒイキの引き倒しとでもい

うべき観があると思う次第です。

しかし、漱石と左千夫との比較という問題はともかくとして、このエピソードが、短歌の有している深さという問題に触れていることも、明らかどころです。それは、もとより、単に短歌の深さという問題ではなく、広く抒情詩の深さという問題であります。いずれにしても本質的には抒情詩の問題として考えねばならない短歌の深さという問題に触れていることは確かです。くり返していえば、すぐれた短歌作品は、その純粋な抒情性の深さによって、一般に散文文学以上に永い生命を保ちやすいということです。というより、じつは散文文学においても、それが文学として永い生命を有するに至るのは、その作品が有している広い意味における「詩」性と呼ぶべきものによってであるように、私は思っています。短歌をこめて、詩歌の作品というのは、そういう「詩」性を純粋たる形において追求し形象化したものであります。そして、それゆえにこそ、それはより永遠性を獲得するに至りうるのだというべきかと思われま。

ところで、そういう抒情詩ないしは文芸そのもののへの不信というものも、相当古い時代から、一方において存在しています。詩の世界に対する無理解からくる不信・否定は論外としまして、詩をも超える次元からの不信・否定が見られるのです。そうした考えがはっきりと現われてくるのは、鎌倉時代初期からだといえるようです。平安時代の中期、恵心僧都は、道心の深さのあまり、詩文のことはいたすらごとくとして否定していた。そして、弟子の稚児のなかに歌の好きな

ものがあるのを破門しようと思つていた。ところが、その稚児が月の美しい夜ふけ、椽に出て手水をつかつて「手にむすぶ水に宿れる月影はあるかなきかの世にもすむかな」（原歌は『拾遺集』に見える紀貫之の歌で、第三句以下が「月影のあるかなきかの世にこそありけれ」となっている）という歌を口ずさんだ。それを聞いて、恵心僧都は感動し、その後は自らも歌を好み詠んだと伝えられています。しかるに、鎌倉時代初期の明恵上人の歌に対する態度は、ちょうどその反対の径路をたどっている。

上人語りて云はく、われ先師の命に依りて、十八歳まで詩賦を稽古して風月にうそぶきしに、その興味深くして他事を忘るる程なりき。然る間、自ら非を知りて、この道を打ち捨てき。然れども雪月の節に引かれて、時々胸に浮かべども取り合ひて一首を作ることは稀なりきと。（『明恵上人伝記』）

と伝えられているのです。

宗教の世界を純粹に追求しようとする者にとって、詩歌の道はついにその障りとなるものでありましょうか。明恵の伝記を読んで、その純粹ではげしい生き方に心を打たれるとき、彼が詩歌の道を捨てたことについて、私は少なからぬ感慨を催します。

こうした明恵の思いは、かの芭蕉が死期の迫った病床において、

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

と詠んだ後、下二句を「枯野を廻る夢心」ともしたいと迷い、そのようなことに心を勞するのを、一種の「妄執」と自ら思ったことと通じているといえましょう。もっとも、芭蕉は、其角の伝え

るところによれば、「是さへ妄執ながら、風雅の上に死なん身の道を切に思ふ也、と悔まれし。」（『桔梗花』）ということになるので、詩歌の世界にかかずらうことを「妄執」と観ずる思いがあつても、芭蕉の人生はついに「風雅の上に死」ぬよりほかはなかった。そこに、詩人芭蕉の生と運命があつたことは、明らかです。しかし、芭蕉よりもはるかに強く純粋な宗教的人間であつた明恵は、芭蕉が文芸のことを「妄執」と観じたその時点において、その思いをさらに徹底させていたのでありましょう。そして、本来、詩人的資質をゆたかに有して深く愛好していた詩歌の道さえ、自ら投げ捨てたのであつたと思われまゝ。ただし、明恵は、いま述べましたように、詩人的性格の強い人であつて、

心の数寄たる人のなかに、めでたき仏法者は、昔も今も出て来るなり。詩頌を作り、歌連歌にたづさはることは、あながち仏法にてはなけれども、かやうの事にも心数寄たる人が、やがて仏法にもすきて、知恵もあり、やさしき心づかひもけだかきなり。心の俗になりぬるほどの者は、稽古の力を積まば、さすがなるやうなれども、いかにも利勘へがましき、有所得にかかりて、拙き風情を帶するなり。をさなくよりやさしく数寄て、まことしき心立てしたらん者に、仏法をも教へ立て見るべきなり。（『明恵上人遺訓』）

ともいったと伝えられています。詩を思い詩を作る「すき」の心の持主が、その純粋な心のゆえに、やがて宗教の高い世界にも入りうるという認識が、ここにはあります。詩歌の世界に熱中しかかづらうことが、宗教心からすれば、一種の妄執であることも、また、「すき」の心が宗教心

に通じること、明恵にとっては、共に真実のことであつたのでしょう。そして、明恵のなかに生息している宗教的人間が歌を捨てようとしても、同じく明恵のなかに生息している詩的人間は歌を全く捨て切れなかつたのであつて、そのことは、こんにち残っているその歌一五〇余首を見るとき、明らかであります。その歌は、また、『新勅撰集』以下の勅撰集にも合計二七首が撰入されていて、明恵は専門歌人からも相当の待遇を受けていたといえます。

明恵より少し遅れて生まれた道元も、

無常迅速なり、生死事大なり。暫らく存命の間、業を修し、学を好まんには、ただ仏道を行じ、仏法を学すべきなり。文筆詩歌等、その詮なきなり。捨つべき道理、左右に及ばず。（『正法眼藏隨聞記』）

今代の禪僧、頌を作り法語を書かん料に文筆等を好む、これすなはち非なり。頌作らずとも、心に思はん事を書いたらん。文筆調はずとも、法門を書くべきなり。これをわるしとて見たがらぬほどの無道心の人、よき文筆を調べ、いみじき秀句ありとも、ただ言語ばかりを翫んで、理を得べからず。われももと幼少の時より好み学せし事にて、今もややもすれば、外典等の美言案ぜられ、文選等も見らるるを、詮なき事と存ずれば、一向に捨つべき由を思ふなり。（同）

といっている。そして、彼も、その家集『傘松道詠』には六〇首の歌を残し、勅撰集では『新後拾遺集』に一首撰入されているが、明恵に比較するとき、詩人的資質においては、はるかに劣っていたといえる。しかしともかく、宗教的世界を徹底して追究しようとするとき、道元もまた、詩文の世界を否定しているのであります。「すき」の心はやがて仏法の深い世界への参入に通じ